
苫小牧市美術博物館 紀要

第 6 号

(苫小牧市博物館 館報 通算17号、苫小牧市博物館研究報告 通算29号)

苫小牧市勇払に漂着したギンカクラゲ

江崎 逸郎

原胤敦奉納鱧口(自然院大成寺所蔵)について

佐藤 麻莉

令和元年度企画展「浅野武彦の木版画の世界」その内容について

大谷 明子

(令和2年度)

苫小牧市美術博物館

苫小牧市勇払に漂着したギンカクラゲ

江崎 逸郎^{※1}

1. はじめに

ギンカクラゲ *Porpita porpita* (Linnaeus, 1758) は、帆走性のヒドロクラゲ類の一種で、普段は海面に浮かび漂流している。本種は世界中の熱帯から温帯の海洋に分布し、西日本の海岸では多くの漂着例が知られる。北海道でのギンカクラゲの漂着は2007年9月22日に小樽市十線浜で初めて発見され(志賀・中司・鈴木,2008)、その後2007年9月から10月にかけて石狩浜と羽幌町の海岸、2012年10月に石狩湾沿岸で大量漂着が確認されている(志賀・石橋,2013; 鈴木・圓谷ほか,2017)。今回、太平洋側である苫小牧市勇払の海岸で漂着を確認したので報告する。

2. 結果

2019年10月9日の午前中、筆者は北海道苫小牧市勇払の前浜公園前の砂浜(図1, 図2)で、約20mの範囲に散らばるように漂着したギンカクラゲを十数個体確認した(図3)。ほとんどの個体で本種の特徴である白色の円盤状の気泡体と、そこから生える多数の青色の感触体が残っていた。周辺には本種以外の漂着物は少なかったものの、種不明の稚魚の死体やコウイカ類の甲、カシパン類の外骨格、海藻などが少数みられた。10月15日、10月17日、10月20日にも同海岸を訪れたが新たなギンカクラゲの漂着は無かった。これまでの北海道におけるギンカクラゲの漂着の報告はいずれも日本海側の海岸であり、太平洋側の海岸の漂着の記録は本報が初めてである。

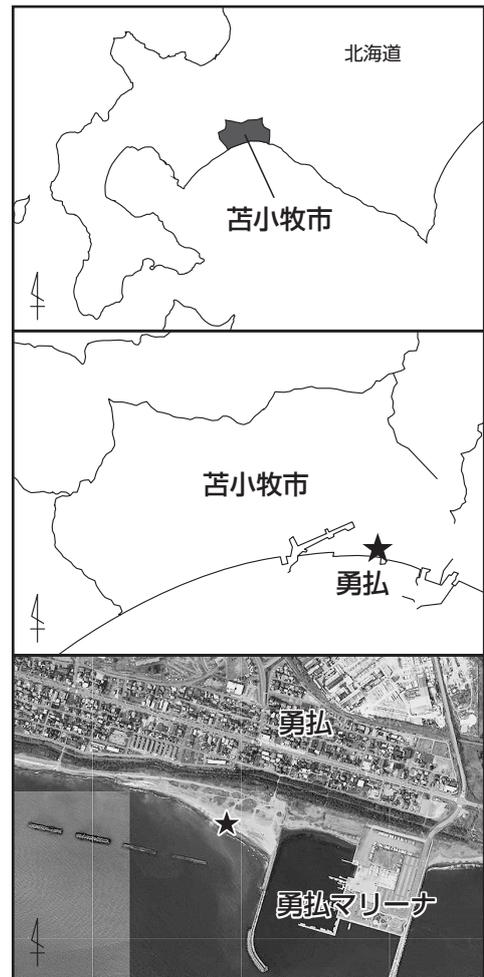


図1 漂着確認地点の位置・苫小牧市勇払
(国土地理院地図より作成)



図2 漂着した勇払の砂浜



図3 漂着したギンカクラゲ

※1 苫小牧市美術博物館 学芸員

謝辞

本稿の執筆にあたり、いしかり砂丘の風資料館学芸員の志賀健司氏には資料の提供やアドバイスをいただいた。この場を借りて厚く感謝申し上げます。

引用文献

志賀健司・石橋孝（2013）石狩湾沿岸で2012年に見られたギンカクラゲの大量漂着. いしかり砂丘の風資料館紀要 3: 37-41.

志賀健司・中司光子・鈴木明彦（2008）北海道におけるギンカクラゲの初漂着. どんぶらこ（漂着物学会会報）26: 6.

鈴木明彦・圓谷昂史・志賀健司・小林真樹・石川慎也（2017）北海道沿岸へ漂着した暖流系浮表性巻貝類とクラゲ類. 「地球科学」 71: 89-91.

はらたねあつほうのうわにぐち
原胤敦奉納鰐口(無量山自然院大成寺所蔵)について

佐藤 麻莉^{※1}

1. はじめに

原半左衛門胤敦^{はらはんざ えもんたねあつ} (1747¹-1827) (以下、原半左衛門) は、八王子千人同心²千人頭をつとめた原家の10代目である。寛政12 (1800) 年3月に北辺の防衛や開拓を目的として弟原胤暉新介と千人同心の子弟100名を伴って武蔵国多摩郡八王子 (現:東京都八王子市) から蝦夷地へ渡った。原半左衛門は白糠 (シラヌカ・現:北海道白糠郡白糠町) へ、原新介は勇払 (ユウフツ・現:北海道苫小牧市字勇払) に入り、それぞれ50名を引き連れて (のちに15名ずつ増員) 警備、開墾などに従事したが、約4年で解散した。

近年、釧路市にある無量山自然院大成寺 (以下、大成寺) の金毘羅堂で発見された「原胤敦奉納鰐口」は、原半左衛門が蝦夷地で活動していた享和元 (1801) 年に白糠の地へ奉納したものである。従来、八王子千人同心関連の資料については、勇払にある「開拓移住隊士の墓³」や、「勇武津不動⁴」、北海道沙流郡日高町門別にある門別稻荷神社所蔵の「原新介奉納扁額」、北海道様似郡様似町の等澗院所蔵の「過去帳 (国指定重要文化財)」ほか、一部の紀行文 (日記) や幕府関係の公文書などでしか、当時の彼らの様子をうかがい知ることができる資料がなく、とりわけ、勇払と同時期に千人同心が移住した白糠での状況に関する資料がほとんど確認されていなかった。そのようななかで、今回の大成寺所蔵の原胤敦奉納鰐口は八王子千人同心の歴史だけでなく、19世紀初頭における蝦夷地の歴史の解明につながるものであると考える。

そこで本稿では、鰐口の形状などの特徴およびその周辺情報を整理する。

2. 鰐口について

鰐口とは、神社仏閣の堂前に、布を編んだ太い綱とともに懸けられ、打ち鳴らすことによって功德を得る鑄造製の音響具である。形態は扁円、中空で、中央に撞座、上部に耳と呼ばれる吊り輪、左右に目と呼ばれる突起、下部に口と呼ばれる横長の開口部をもつ。その製作は平安時代中期に始まり、中世以降盛んになり、各地の社寺に奉納された。しかし、明治元 (1868) 年の神仏分離令発令とともに多くが処分されたり、戦時下の金属供出の対象となった。先行研究において、北海道では形態の知られる22例が実物または写真で確認されている⁵。

さて、原胤敦奉納鰐口の材質は青銅製である。鰐口は大きな破損等は見られず、【図2～4】に示すように原形を保っている。外形の計測の概略は次の通りである。正面径は14.95cm、最大幅 (左と右の目の間の距離) は19.6cm、肩から唇までは17.25cm、胴の厚みは5.2cmである。

左右の耳の位置は正面の中心線よりも上部にあり、中心から60度の角度に位置する。左側の耳の付け根の長さは4.5cm、高さ2.2cm、右側の耳の付け根の長さは4.5cm、高さ2.2cm、耳の厚さは0.7cm、断面は円形、耳の内側に擦れたような痕跡があることから、吊り下げられていた可能性がある。左耳と右耳の間の長さは4.4cmである。

肩は、鰐口の側面から見ると、中央部を頂として三角形を呈している。幅は5.6cmである。

※1 苫小牧市美術博物館 学芸員

目については、目の長さが1.9cm、目の端の幅は2.1cm、目の付け根の幅は4.5cm、目の中心の形は穹窿状に近い。

唇の張り出しは1.2cm、口の開きは0.3cm、左右の口の端から端までは17.1cmである。

鰐口の正面の状態は、中央に撞座があり、蓮華文が鋳出されている。この蓮華文は葉形の花弁が8葉重ねられている。内区と銘帯は無文である。銘帯には下部と左右に1cmほどの文字で銘が刻まれ、下部に「敬白」、右側に「奉獻御寶前」、左側に「白糠鎮守三十番神」とある。正面の地はほぼなめらかに調整されている。

圏線は、二条の外圏線、二条の中圏線、二条の内圏線を持ち、銘帯と撞座区、内区の区分がある。色調は錆により全体的に暗緑色である。

一方、鰐口の裏面は、正面と同様に中央の撞座に8葉の蓮華文が鋳出されている。内区と銘帯は無文であり、銘帯には下部と左右に1cmほどの文字で銘が刻まれている。下部に「助右エ門作」、右側に「享和元辛酉四月十七日」、左側に「東都朝士平姓原氏胤敦」とある。

圏線は、二条の外圏線、二条の中圏線、二条の内圏線を持ち、銘帯と撞座区、内区の区分がある。全体に錆びて暗緑色を呈し、鋳肌の上部には多くの凹凸がみられる。

上記の特徴から、原半左衛門が享和元（1801）年4月17日に白糠へ納めた鰐口であり、鰐口の作者は助右エ（衛）門であると判明する⁶。加えて、耳の断面が丸みをおびている・鰐口の正面からみた目の形状が丸い・内区に蓮華文がみられないなどの形態的特徴は、18世紀から19世紀への移行期ころの形態を示すといえ、これは鰐口に刻まれた享和元年の銘の年号とも合致する⁷。

3. 鰐口の奉納場所

原胤敦奉納鰐口は釧路市の大成寺の境内にある金毘羅堂で同寺の副住職によって発見された。大成寺は、明治15年（1882）に三河出身の忍譽徴源上人が来釧し、松前正行寺の仮説教所を開設したのをきっかけに、明治17年（1884）の12月に寺号公称して無量山自然院大成寺となった。大成寺に保管されている記録によると、金毘羅堂は、明治17年の寺号公称の翌年に建立されたという。幕末に場所請負人佐野孫右衛門の支配人や通詞をつとめた豊島三右衛門が白糠村で所管し祀っていた尊像を、大成寺境内に金毘羅堂を造り安置したとされる。おそらくこの遷座に伴い、鰐口の所在が白糠から釧路へと移動したとみられる。

ところで、当初鰐口が奉納された場所はどこであったのだろうか。原半左衛門ら八王子千人同心が白糠を拠点としていた点、鰐口の銘に「白糠鎮守三十番神」とある点からも、もともとは白糠に存在していたのは間違いないと思われる。

白糠に鰐口があったことを裏付ける記述が、文化6（1809）年に松前奉行支配調役の荒井保恵によって記された「東行漫筆」にある。白糠の当時の様子を記した場面に、「一、原半左衛門居候節稲荷と番神の社二ヶ所取建有之⁸」という記載がみられ、原半左衛門が白糠にいた際に稲荷の社と番神の社の2ヶ所を建てたと記されている。鰐口に「番神」の文字が刻まれていることをふまえると、原半左衛門が白糠に三十番神の社を建立し、そこへ鰐口を奉納したと考えるのが妥当である。あわせて、三十番神の社の成立年代は、八王子千人同心の移住開始時期が寛政12（1800）年であり、鰐口に刻まれた銘には「享和元辛酉四月十七日」とあるから、寛政12年か享和元（1801）年頃と推測される。

つづいて、「東行漫筆」から約50年後の安政3（1856）年に、蝦夷地を探検した松浦武四郎が白糠の様子を以下のように述べている。（傍線は引用者による。）

シラヌカ

此辺の地形白岩崩岸にして通行屋一軒（九十六坪）、板蔵三、細工小屋、茅蔵、秣屋、馬屋、上に観音堂一字、本尊岩船明神、三十番神、稻荷を祭る⁹。

傍線部をみるとシラヌカに観音堂がひとつあり、岩船明神と三十番神と稻荷を祀っていると書かれている。ここで示された三十番神と稻荷が原半左衛門の建立したものとするならば、安政3（1856）年の時点において、弁天社に安置されていた岩船明神¹⁰と合わせて観音堂に一つにまとめられていたことが判明する。松浦武四郎が記録した観音堂と、豊島三右衛門が関与した金毘羅堂が同義であるか否かについては検討を要するが、少なくとも白糠では江戸時代から明治時代にかけて堂社の変遷が何度かあり、三十番神の社はその影響を受けていた。それに伴い、鰐口の安置場所が変わっていったのである。

4. 鰐口奉納の背景とその目的

18世紀後半、蝦夷地には異国船が数多く接近し、さらにはロシアが南下政策を推し進めていた。蝦夷地が外国の脅威にさらされていることを強く意識した江戸幕府は、寛政11（1799）年に、7年間の東蝦夷地の仮上知（仮に幕府の直轄地とする）を決定した。これは、江戸幕府始まって以来の蝦夷地政策の大転換であった。

当初の蝦夷地経営の方針は、外国との緩衝地帯とみなしていた「異国境（蝦夷地）」の「開国（内国化）」であった。幕府はアイヌ民族の和風化など、積極的に蝦夷地を開発しようと考えていた。八王子千人同心が蝦夷地の警備と開拓を願い出た背景は、こうした幕府による蝦夷地の直轄化およびロシアの南下対策だけでなく、千人同心子弟・厄介者の就職対策や、身分向上や組織再生の意図があったと指摘されている¹¹。

寛政12（1800）年、千人頭である原半左衛門とその弟原新介は同心子弟100名を率い、武蔵国八王子から蝦夷地の白糠と勇払に入った。勇払では、原新介が、幕府の役人高橋三平の配下として警備、開拓、交易、道路建設などに従事した。13件ほどの家に分宿し、鶴川領汐見（現：北海道むかわ町汐見）の開墾を行った。

白糠では、原半左衛門の指揮のもと白糠、尺別（現：北海道釧路市音別町尺別）、庶路（現：北海道白糠郡白糠町）地区に分駐して警備、開拓、土木事業にあたった。現在、白糠町泊に「原半左衛門縁の地」の石碑が建てられており、その後方の台地が原半左衛門の本陣地と伝えられている。

千人同心たちがまずはじめに行ったのは自給に向けた開墾であった。移住した寛政12（1800）年7月に、幕吏である戸川安論と大河内政良らが視察に訪れた際、随行者の吉田有利は、白糠で開墾幡種の作業が行われていたことを述べている。その後、享和2（1802）年の作物の収穫量は、大麦二斗、粟二斗、蕎麦五斗五升、芋五斗、菜種一斗、大根三万本であったという。田畑の開拓以外では、寛政12（1800）年に原半左衛門の手付の者が阿寒山で硫黄や明礬の採掘に携わるほか、享和元（1801）年には斜里山道の開削にも着手した。

しかし、蝦夷地に入って4年が経過した文化元（1804）年に、集団移住は終わる¹²。同年3月に原半左衛門が出した報告によれば、蝦夷地に渡った130名のうち、蝦夷地の残留者は箱館に9名、鶴川43名、白糠26名、山越内1名、帰国者は19名で、死者は32名となっていた¹³。移住者の約4分の1

が亡くなった要因は、慣れない蝦夷地での生活で壊血病や浮腫などの病に冒されたり、寒さをしのげなかったことなどによるとみられている。

このような蝦夷地での生活において、鰐口は何らかの願いをもって製作されたと考えられる。ここで、鰐口に刻まれた「白糠三十番神」という記述に着目する。原家の菩提寺は、八王子にある日蓮宗の寺院、長光山本立寺である。日蓮宗では三十番神（30の神々が1ヶ月30日の間、毎日交代で国家と人々を守る）を重視する。文献資料上からは鰐口に関する記述を確認できないため、原半左衛門が鰐口を奉納した理由は定かでないものの、先祖代々の信仰である三十番神を蝦夷地へ持っていくことで、八王子から遠く離れた蝦夷地での日々の暮らしの安全を願ったのではないだろうか。

5. おわりに

以上、原胤敦奉納鰐口について現段階で判明している情報を、鰐口の形状、奉納場所や年代、鰐口が奉納された背景に分けて整理した。今後の課題として、鰐口の奉納目的や当初の奉納場所などを含む鰐口の製作から奉納までの経緯や、資料上に記載された三十番神の社と大成寺に遷座した金毘羅堂との関係性、鰐口が白糠や釧路の地域（和人、アイヌの人々など）に与えた影響などについて、より詳細に明らかにしていきたい。

¹ 延享4（1747）年とも、寛延2（1749）年の出生ともいわれている。

² 八王子千人同心は、武田信玄の家臣団をルーツにもち、近世初頭から幕末に至るまで、武蔵国多摩郡八王子を中心に居住していた郷土集団。郷土とは、日常的には農業を営み、一般の農民と同じように年貢を納入している一方で、幕府から扶持米、切米を給付され、時には武士としての「役」を担う＝半士半農の存在であった。公務は日光勤番（日光の防火役）・江戸火消役などである。

³ 勇払に位置する開拓史跡公園内に、18基の墓石が保存され、29名の霊名が刻まれている。そのうち八王子千人同心関係の墓は、4基9名である。苫小牧市指定文化財。

⁴ 原半左衛門・新介隊以外にも、寛政12（1800）年に志村組組頭杉山良左衛門、河野組組頭石坂武兵衛、山本組組頭見習河西祐助の3名が家族同伴で江戸を発っている。彼らは蝦夷地で公務を執り行う下役人として、杉山が山越内（現：北海道二海郡八雲町）、石坂が七重（現：北海道亀田郡七飯町）、河西は勇払に在住した。河西祐助は、勇武津不動（波切り不動）を建立し、勇払の地に納めた。

⁵ 大沼忠春「沙流郡「波恵村」出土の天和三年銘鰐口について」（『北大植物園研究紀要』第6号、2006年）ちなみに、苫小牧市では文化10（1813）年の銘がある勇払恵比須神社奉納の鰐口が1点確認されており、市指定文化財となっている。また、八王子市では15世紀から16世紀にかけての鰐口4点が現存し、すべて市指定文化財となっている。

⁶ 鰐口の作者「助右エ門」についての詳細はいまのところ不明である。

⁷ 鰐口の形態的特徴に関しては大沼忠春氏のご教示による。

⁸ 荒井保恵「東行漫筆」（『秋葉実編『北方史史料集成』第一巻、北海道出版センター、1991年）、120頁

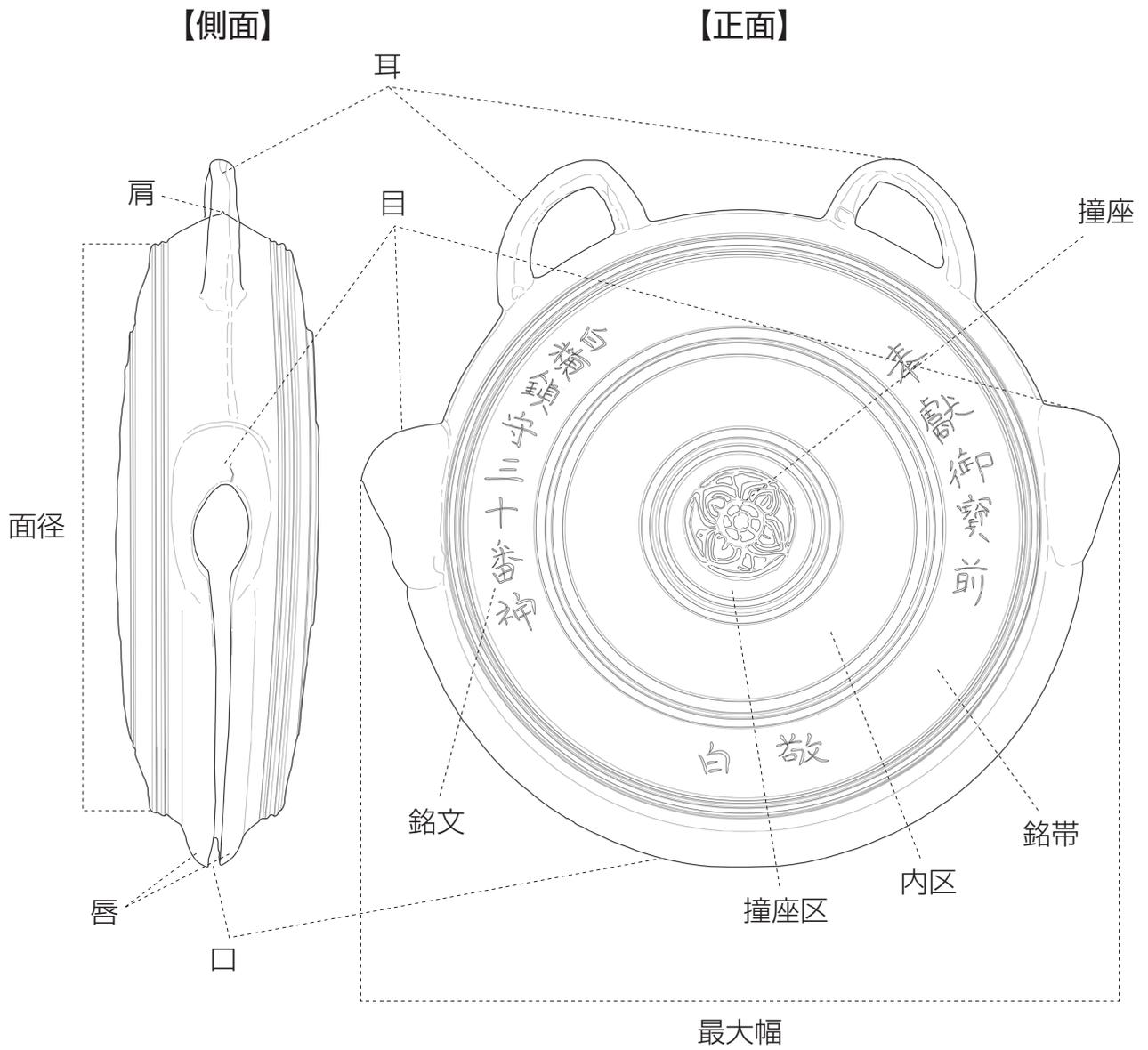
⁹ 松浦武二郎「竹四郎廻浦日記」巻の二十六（高倉新一郎編『竹四郎廻浦日記』下、北海道出版センター、1978年）、456頁

¹⁰ 寛政12（1800）年に戸川安論、大河内政良の東蝦夷地巡検に随行して国後島まで赴いた吉田有利が著した「東蝦夷地日記」によれば、白糠の弁天社に岩船明神があると記されている。したがって、寛政12年の時点では弁天社（岩船明神）、稲荷の社と三十番神の社は別であったことが分かる。

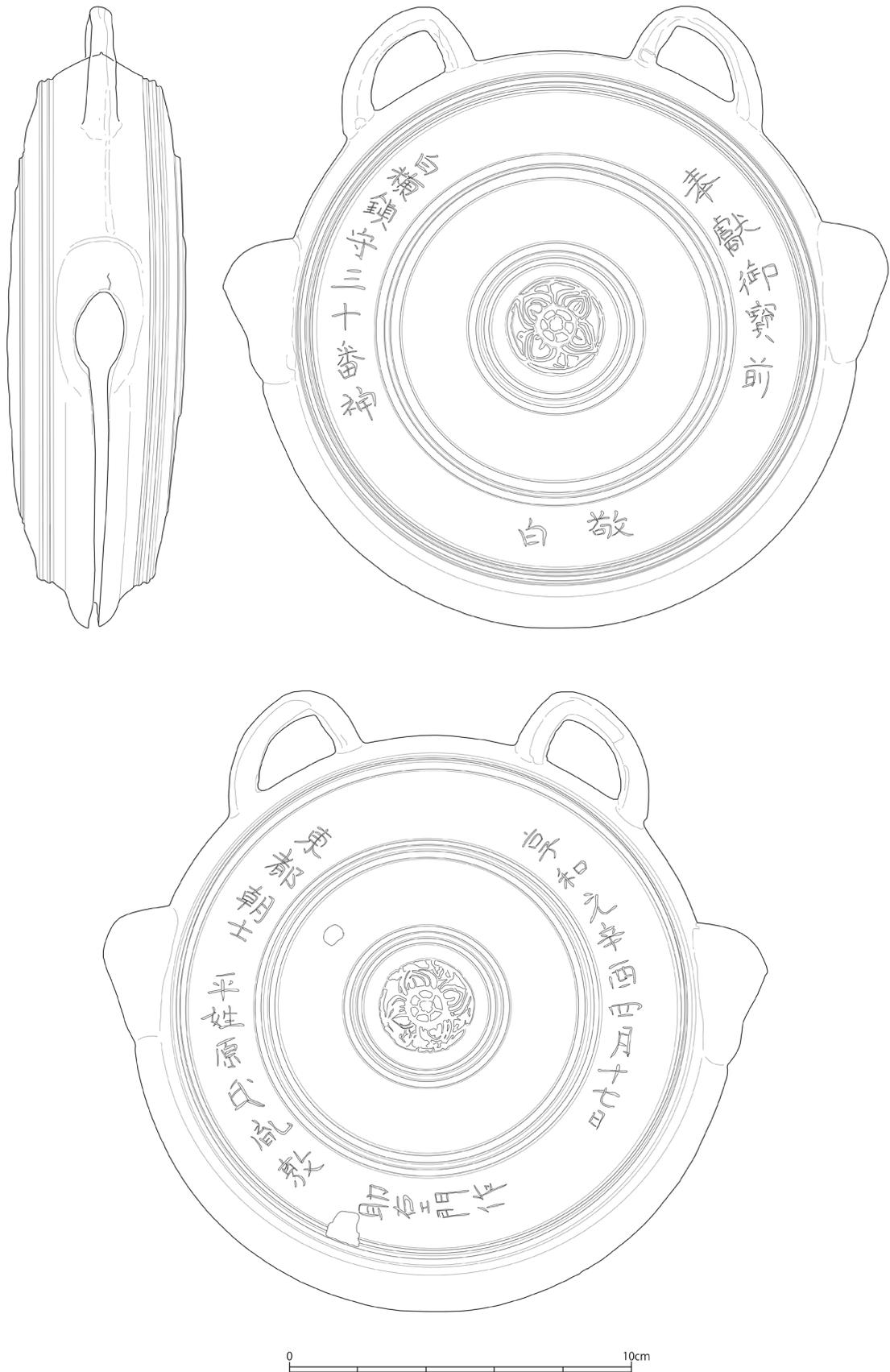
¹¹ 主な先行研究としては、菊地新一「蝦夷地の八王子千人同心史」（『郷土の研究』創刊号、苫小牧郷土文化研究会、1964年）、菊地新一「北海道屯田制度の先駆的類型 八王子千人同心の移住を中心として」（『経済論集』第4号、大東文化大学経済学会、1966年）、村上直編『八王子千人同心史 通史編』八王子市教育委員会、1992年、堀江敏夫「勇払・鶴川地域の開拓」（村上直編『江戸幕府八王子千人同心』雄山閣出版、1993年）、谷本定穂「白糠地域の開拓」（村上直編『江戸幕府八王子千人同心』雄山閣出版、1993年）、吉岡孝『八王子千人同心』同成社、2002年などがある。

¹² 文化元（1804）年2月、原半左衛門は箱館奉行所支配調役に転任し、原新介は、同年に、有珠・虻田牧場の支配調役となって転任した。手付の者たちは地役御雇として各地へ転属になった。

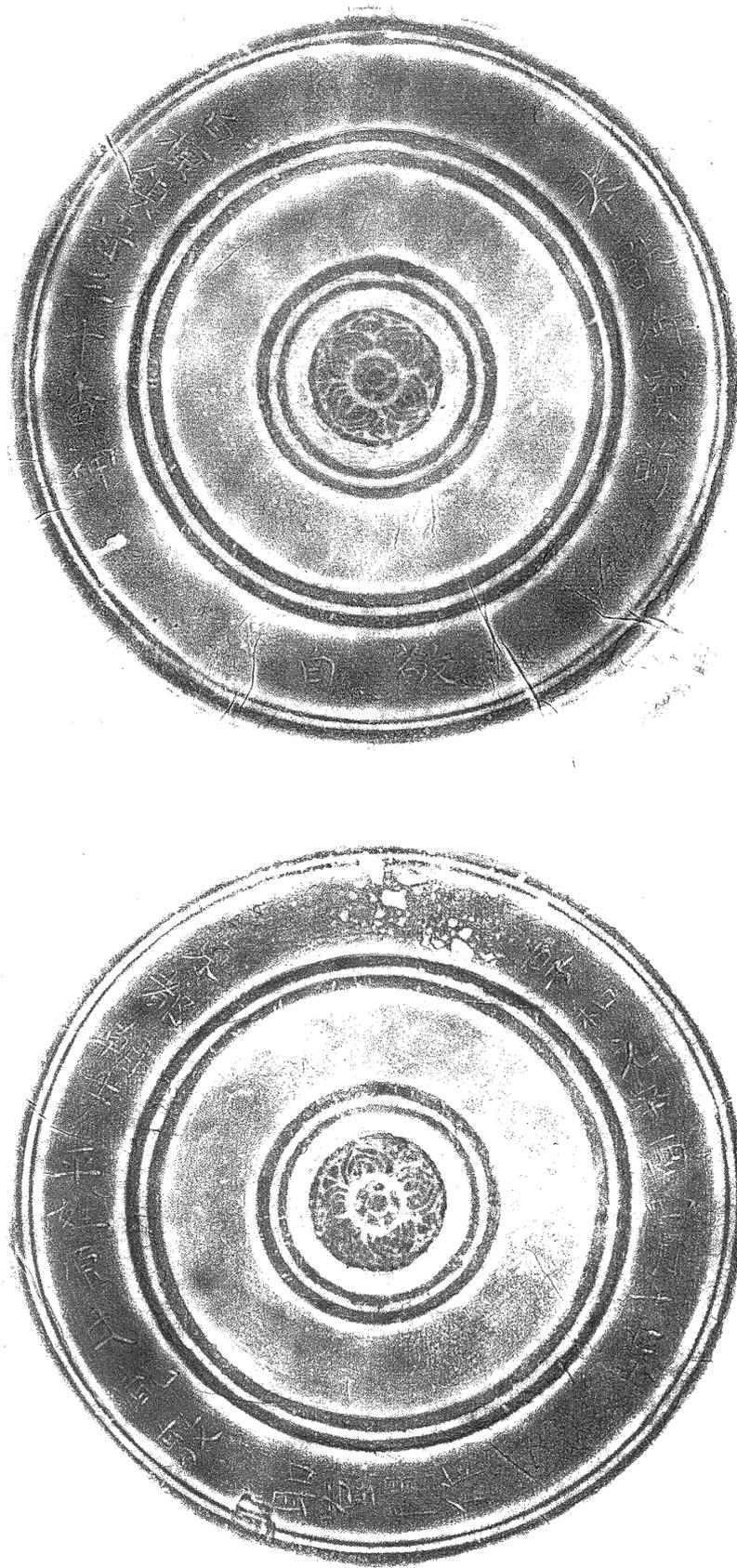
¹³ 塩野轍編輯・山本正夫訳・鈴木竜二編『桑都日記』巻之十四 中編下、鈴木竜二記念刊行会、1973年、870頁



【図1】 鱧口の各部名称



【図2】 鱧口の模式図



【図3】鰐口の拓本



【図4】 鱧口の画像

展覧会報告 令和元年度企画展「浅野武彦の木版画の世界」その内容について

大谷 明子^{※1}

1. はじめに

札幌市生まれの木版画家である浅野武彦（1927-2016）は、1954年札幌版画協会の創立に関わり、北海道の版画界の始まりにおいて重要な役割を果たした作家の一人である。また北海道大学医学部を卒業後市立苫小牧総合病院にて内科医師として勤めあげ、版画家と医師の二つの顔をもつ人物でもあった。北大予科3年の時、白老町に疎開していた版画家・川上澄生（1895-1972）を訪問し、以後長きに渡って交流する。1992年には苫小牧市民文化賞を授与し、苫小牧美術協会では2004年から6年間会長を務めるなど苫小牧の美術界を牽引した。

当館では、夫人の智枝子氏より寄託いただいた浅野の作品をもとに、2019年12月7日～2020年1月19日に企画展「浅野武彦の木版画の世界」を開催した。浅野作品については、以前より寄贈および購入により収集し、収蔵品展などを通して展示をしてきたが、初期の作品から全貌を俯瞰する個展はこれまで開催しておらず、本展覧会は当館において初めてその画業を紹介する機会となった。会場は主題ごとに5つのセクションで構成し、資料を含め111点を展示した。本稿では浅野の画業の紹介として展覧会の内容をセクションごとに報告し、浅野の制作に影響を与えた川上澄生とのかかわりと浅野作品において特徴的な骸骨をモチーフとする作品についてまとめる。

2. 展覧会の概要

(1)浅野武彦と版画制作

浅野武彦は、札幌第一中学校（現・札幌南高等学校）の頃より独学で版画を始める。北海道帝国大学（現・北海道大学）の学生だった1946年6月に、全道美術協会創立展覧会にて木版画家・川上澄生が北海道に疎開していることを知り、意を決して手紙を出した。当時、浅野の近所に疎開してきていた演劇研究家・郡司正勝（1913-1998）にも川上に師事することを勧められたという。同年8月に白老町の川上宅を訪問する。これ以降、川上澄生との交流は、訪問や作品を同封した手紙を通して、川上が亡くなるまで26年間もの長きに渡って続く。浅野自身、「私の版画は川上澄生との出会いから始まっていると言ってもよい」（浅野 2009）と表現するほど、浅野の版画制作において川上との関係は大きな意味を持っていた。

展示室（図1）では、川上澄生からの最初の返信のはがきをはじめとして、作品に言及している手紙およびその作品、年賀状、彫刻刀とバレンを展示した。また、川上へ作品を送付していた時期を含む1940～50年代は「武彦作品集」として裏に制作年および番号がふられた作品群がある。次のセクション以降も、それらの作品を含めて展示し、川上の手紙に言及されている場合は、川上の言葉を引用してパネル化し作品と並べて展示した。手紙と作品を並置することで、師である川上の着眼点や、指導による改作のある作品ではその修正過程について詳細にみる事ができた。

※1 苫小牧市美術博物館 学芸員

(2)風景

浅野の描く風景では、岩肌・樹皮・雪といった自然の造形に対する探究心が感じられ、質感や温度といった触覚の表現までもが追究されている。岩場を描いた作品では、大地と水が生み出した土地ごとに異なる岩の表情が、形態を単純化しながら克明に描き出されている。浅野は学会や旅行で各地に足を運ぶ機会が多く、その折に創作活動の取材も行った。また、雪景色は浅野が好んだ風景で、北大予科医類の時の長い冬休みや、家庭を持った後も雪が降った朝には息を弾ませて出かけてはスケッチと写真撮影をして持ち帰り、丹念に作品化した。岩場を描いた作品(図3)では単色刷りによって力強く描いたのに対し、雪景色を描いた作品(図4)では、灰色を用いた多色刷りの柔らかな表現になっている。他方、浅野の風景画にはしばしば空に丸みを帯びた雲が浮かび、画面に独特のユーモアを添えて親しみを生み出している。展示室(図2)では、岩場、雪景色、山、直線的な建物を描いた作品を展示した。

(3)骸骨

浅野は、北海道大学医学部時代に解剖実習で骸骨と向き合うなかで、独特の美を見出した。教授の許可を得て、実習の時間外に多数のスケッチを行い、後年の骸骨の作品もそれらのスケッチをもとに描かれている。骸骨を描いた作品では、文学を好んだ浅野らしく、芥川龍之介や深沢七郎の文学作品に取材した作品も見られ、浅野独自の生と死の視点が交差した作品となっている。あたたかみのある浅野作品のなかで、骸骨を描いた作品は一転してテーマと画面ともに重みを増し、骸骨の描写には医師としての鋭い観察眼も感じられる。これらの骸骨をモチーフとした作品は自然やいのちあるものに真摯に向き合ったからこそその作品であり、医師と木版画家の両方の顔をもつ浅野独特の作品世界が展開している。

展示室では、川上澄生から添削を受け改作した《解剖実習之図》(図5,6)、暗闇の中に骸骨が横たわる作品、および文学に取材した《^{かんた}た多》(1975)(図7)《俊寛》(1980)(図8)を含む作品を展示した。《解剖実習之図》は、川上からの手紙と改作前の1948年の作品画像と並べて展示し、比較できるようにした。骸骨を描いた作品では、初期では単色刷りで描かれるが、文学に取材した作品などでは多色刷りもみられる。

(4)植物

植物を描いた作品では、画面を埋め尽くすように多数の対象を配した作品が見られる。これらの作品では、同じ図が繰り返されるのではなく、蕾から花開くまで、同じモチーフのさまざまな表情が描き込まれる。《もくれん》(1979)(図9)もその一つで、広がった枝の先についたたくさんのモクレンの花を画面いっぱい散りばめている。モクレンは一斉に天に向かってまさに花開かんとしている姿がエネルギー感であり、浅野は見る者に生命感を与えたと感じていた(1997年6月5日苫小牧民報)。

展示室では、バラ、水芭蕉、ユリ、モクレンなど花ごとにまとめて展示した。花を描いた作品では、色数の多い多色刷りの表現が多くみられる。

(5)いきもの

動物や魚などを描く浅野は、特徴を捉えて簡略化した曲線でいきものの体に特有の愛らしい丸みを描出する一方で、団子のように連なるカタツムリやこちらに視線を向ける魚を描くなど、いきもののユーモアのある一場面を楽しむ。いきものを描いた浅野作品では、同種で群れる様子を描いた作品(図10)が多く、こうした画面からはいきものが身を寄せ合って生きる姿に対する浅野のあたたかいまなざしをも感じられよう。

展示室では、初期の作品で川上澄生のコメントのあるフクロウをはじめとして、ハクチョウ、リス、牛、イカ、魚、貝などを描いた作品を展示した。

3. 川上澄生とのかかわりについて

浅野は、学生時代の訪問から手紙のやりとりも含めて26年に渡って川上澄生と交流し、手紙を通じた作品の添削など指導を受けていた。弟子をあまりとらなかつた川上においてははめずらしい版画の教え子である。年賀状やクリスマスカードを除いた全75通の川上澄生の浅野宛て書簡からは、川上からの指導の内容や年齢を超えたあたたかな交友を垣間見ることができる。このうち、指導の様子や身辺報告が読み取れる71通のはがき及び手紙については、当館（苫小牧市博物館）の研究報告第9号および第11号にて報告されている（三村 1993年; 2001年）。また、小林（2004年）は、これらの書簡の内、浅野の作品を添削している文から、弟子への具体的な指導のなかに川上澄生自身の作品創造の原理を読み取っている。

そうした二人の関係を踏まえつつ、以下は浅野作品にみる川上澄生とのかかわりを検討したい。浅野は川上より造形的な助言のほか、技術的な指導も受けていた。川上宅を訪れた際には手をとって道具の使い方まで直接に教えてもらったという。浅野の実際の作品を見ると、摺りが丁寧に行われていることがわかる。川上は、青磁社から出版される中山省三郎訳『トルストイ童話集』のための特装版の色刷り口絵の刷りを1948年に浅野に依頼している（川上 1948年11月5日）。浅野自身は、医学生の際に高価な書籍を買うのに資金を必要としていたところへ川上が気を遣ってくれたと回想しているが（1997年6月2日苫小牧民報）、摺りは仕上がりに関わることであり、この作業を依頼したことは師弟の信頼関係によるものであるともいえるだろう。

浅野の作品について川上は、手紙の中で「あなたの絵はいつもそつがないのです。私のほしいのはもっと一癖も二癖もあるものです」と書いている（川上 1948年9月29日）。《解剖実習之図》（図5）においても、もっとデフォルメをした方がよいとアドバイスしているが、この作品への言及で注目したいのは「これは連作するときと面白いものが出来ると思ひます 普通の人ニは求められない題材ですから」とこの作品に浅野の独自の表現を見出していることである（川上 1948年2月1日）。そのことを裏付けるかのように、のちに改作した図6を含む解剖実習の連作全6点は1958年の第26回日本版画協会展にて入選する。浅野はその後も解剖実習に始まる骸骨のモチーフを追究していくように、師からの言葉にも勇気づけられながら骸骨を独自のモチーフとして取り組んでいったといえるだろう。

4. 骸骨のモチーフ

浅野の作品においていっそう独特であるのは、骸骨の作品である。医師、文学への関心、白と黒の世界など、骸骨の作品には浅野を特徴づける要素が見いだせる。

医学部の一年生で行う人体の解剖実習では、筋肉、内蔵、血管、神経など人体の仕組みを数ヶ月かけて勉強し、最後の段階では人体は骨だけになる。実習が終わるころ、窓からさす月の光のもとで十体の人骨が浮かび上がった様は、浅野によれば「荘厳というか、一種独特の雰囲気」があったという（1997年5月30日苫小牧民報）。浅野は幼少期から単色刷り版画の白と黒の世界に魅了され、多色刷りよりも「黒一色の方が強い表現方法」であり、「難しいが、成功すれば色付きのものよりずっと強く訴える力がある」と感じていた（1997年6月3日苫小牧民報）。医学生の際の解剖実習において白い骨だけが浮かび上がった光景を目前にして、「ここにも白と黒の世界が存在することを改めて認識」し、制作意欲に駆られた。「皮あり肉あった生体のころはやわらかな曲線美が主体であったのに、骨となって見ると刻刀の線に適した直截な線が主体となっておのずから版画の表現に適したものに变化しているのを見、それまで頭にあったルドン、ムンク、ブリューゲ

ル等とも混淆して私なりの表現をせずにはいられない衝動にかられたものだった」と回想している（浅野 1961）。

この回想にもあるように浅野は若いころに見たエドヴァルド・ムンク（1863-1944）の石版画《臨終の床》（1896年）に刺激を受けたというが、医師として経験した場面から独自の作品テーマが生まれた。ムンクの石版画では、ベッドに横たわる人物とそれを取り囲む人々が白と黒で描かれる。空間には幾筋もの揺らめく線が描かれ、息を引き取った者とそれを見守る者の感情がにじみ出ているようである。一方、浅野の解剖実習の作品（図5,6）では台上の人体とそれを囲む実習生が黒の太い線で描かれる。照明と台との空間に揺らめく線はムンクの作品と類似しており、実習室の静けさの中で人体と向き合う緊張感のある雰囲気強調されている。「芸術が永遠のテーマにする美は、命の誕生やかがやき、あるいは命の消滅一などというように、命の在り方と深くかかわっている」（1997年6月5日苫小牧民報）という自身の言葉のとおり、版画家としての浅野は、医学を学ぶなかで骸骨に白黒の独特の美を見出していった。後年は骸骨をモチーフとした作品は見られなくなるが、明確な理由は記されていないものの、「お医者さんがあんな骸骨の絵をかくなんで非情なものです」と患者に言われて啞然としたというエピソードがその背景にあるとも推察できる。浅野自身が骸骨の風景について「美しく且つ人生の何物かを深く考えさせられる情景の一つと思われる」（浅野 1961）と述べているように、骸骨は医学の道を歩み人の命を扱った浅野にとって忌み避ける対象ではなく、むしろ生と死とが連続している人間のひとつの姿として、身近でありながらも深い思索を促すモチーフであった。

【謝辞】

本稿の執筆にあたり、特に浅野智枝子氏、松野玲子氏、三村伸氏より資料提供をはじめ貴重なご教示、ご協力をいただきました。記して厚く感謝申し上げます。

引用文献

- 浅野武彦「白と黒 浅野武彦」道版ニュース第6号 1961年10月31日。
- 浅野武彦「働いてちょっぴり楽しんで先輩たちの物語329『私の木版画⑤浅野武彦さん』」苫小牧民報 1997年5月30日。
- 浅野武彦「働いてちょっぴり楽しんで先輩たちの物語330『私の木版画⑥浅野武彦さん』」苫小牧民報 1997年6月2日。
- 浅野武彦「働いてちょっぴり楽しんで先輩たちの物語331『私の木版画⑦浅野武彦さん』」苫小牧民報 1997年6月3日。
- 浅野武彦「働いてちょっぴり楽しんで先輩たちの物語332『私の木版画⑧浅野武彦さん』」苫小牧民報 1997年6月4日。
- 浅野武彦「苫美協の70年 会長 浅野武彦」『苫小牧美術協会70周年記念誌』苫小牧美術協会、2009年、pp.1。
- 川上澄生 浅野武彦宛書簡、1948年9月29日。
- 川上澄生 浅野武彦宛書簡、1948年2月1日。
- 川上澄生 浅野武彦宛書簡、1948年11月5日。
- 小林利延「第一八章 技法の伝授にみる創造原理 個人教授で明かされる原理」『評伝 川上澄生』下野新聞社、2004年、pp.485-492。
- 三村 伸「浅野武彦宛川上澄生書簡」苫小牧市博物館『研究報告第9号』1999年、pp.11-35。
- 三村 伸「浅野武彦宛川上澄生書簡～その2～」苫小牧市博物館『研究報告第11号』2001年、pp.1-28。

浅野 武彦 年譜

1927 (昭和2) 年		札幌市で誕生
1945 (昭和20) 年	18歳	北海道帝国大学入学
1946 (昭和21) 年	19歳	白老に疎開していた川上澄生に師事
1947 (昭和22) 年	20歳	全道美術協会展第2回展出品 (以後2012年まで継続出品)
1954 (昭和29) 年	27歳	札幌版画協会創立会員
1956 (昭和31) 年	29歳	苫小牧美術協会会員
1958 (昭和33) 年	31歳	北海道版画協会創立会員
1958 (昭和33) 年	31歳	日本版画協会展に出品 (~ 1959年)
1975 (昭和50) 年	48歳	全道展会員
1992 (平成4) 年	65歳	苫小牧市文化賞受賞
1995 (平成7) 年	68歳	苫小牧市民活動センターにて個展
1997 (平成9) 年	70歳	札幌時計台ギャラリーにて個展
2003 (平成15) 年	76歳	苫小牧市立中央図書館にて個展
2004 (平成16) 年	77歳	苫小牧美術協会会長 (~ 2009年)
2016 (平成28) 年	89歳	逝去



図1 展示風景



図2 展示風景



図3《立待岬》
1982年、苫小牧市美術博物館蔵



図4《武彦作品集 第84 雪の岳林原》
1955年、苫小牧市美術博物館蔵



図5《解剖実習之図》1948年



図6《解剖実習之図》
1958年、苫小牧市美術博物館蔵



図7《捷陀多》
1975年、苫小牧市美術博物館蔵



図8《俊寛》
1980年、苫小牧市美術博物館蔵



図9《もくれん》
1979年、苫小牧市美術博物館蔵



図10《群れ》
1981年、苫小牧市美術博物館蔵

表2 企画展「浅野武彦の木版画の世界」出品作品一覧

第1章 浅野武彦と版画制作

番号	作家名	資料名	制作年	材質技法ほか	寸法(縦×横mm)	所蔵先
1	川上 澄生	はがき(昭和21年8月6日消印)	1946	はがき		個人蔵
2	川上 澄生	はがき(昭和23年9月30日消印)	1948	はがき		個人蔵
3	浅野 武彦	武彦作品集 第59 鯖を釣る人々	1948	木版多色刷、紙	171×216	個人蔵
4	川上 澄生	はがき(昭和24年3月1日消印)	1949	はがき		個人蔵
5	浅野 武彦	武彦作品集 第61 年末風景	1949	木版多色刷、紙	219×174	個人蔵
6	浅野 武彦	武彦作品集 第62 樹間(大学構内)	1949	木版多色刷、紙	211×172	個人蔵
7	浅野 武彦	武彦作品集 第63 雪晴(大学構内)	1949	木版多色刷、紙	126×173	個人蔵
8	川上 澄生	年賀状	1947	木版多色刷、手彩色、はがき		個人蔵
9	川上 澄生	年賀状	1953	木版単色刷、はがき		個人蔵
10	更科 源蔵	年賀状	1957	木版単色刷、手彩色、はがき		個人蔵
11	今田 敬一	年賀状	1965	木版多色刷、はがき		個人蔵
12	手島 圭三郎	年賀状	1982	木版多色刷、はがき		個人蔵
13	加藤 八洲	年賀状	1983	木版多色刷、はがき		個人蔵
14	浅野 武彦	年賀状	1950	木版単色刷、手彩色、はがき		個人蔵
15	浅野 武彦	年賀状	1983	木版単色刷、手彩色、はがき		個人蔵
16	浅野 武彦	ウトナイ遊園	制作年不詳	木版多色刷、紙	91×139	個人蔵
17	浅野 武彦	制作工程	制作年不詳	木版単色刷、紙	91×140	個人蔵
18	浅野 武彦	制作工程	制作年不詳	木版単色刷、紙	91×141	個人蔵
19	浅野 武彦	制作工程	制作年不詳	木版単色刷、紙	91×142	個人蔵
20	浅野 武彦	道具箱				個人蔵
21	浅野 武彦	パレン				個人蔵

第2章 風景

番号	作家名	資料名	制作年	材質技法ほか	寸法(縦×横mm)	所蔵先
22	浅野 武彦	武彦作品集 第78 ちぎれ雲(支笏湖)	1951	木版単色刷、紙	150×266	個人蔵
23	浅野 武彦	武彦作品集 第82 断崖	1954	木版単色刷、紙	311×402	個人蔵
24	浅野 武彦	岬(積丹にて)	1977	木版単色刷、紙	345×252	個人蔵
25	浅野 武彦	立待岬	1982	木版単色刷、紙	318×457	個人蔵
26	浅野 武彦	雲丹とりぶね	1985	木版単色刷、紙	258×352	個人蔵
27	浅野 武彦	関の鼻	1986	木版単色刷、紙	316×459	個人蔵
28	浅野 武彦	崖と港	1990	木版単色刷、紙	263×347	当館蔵
29	浅野 武彦	しれとこ	1991	木版多色刷、紙	160×229	個人蔵
30	浅野 武彦	知床	1993	木版単色刷、紙	145×196	個人蔵
31	浅野 武彦	不詳	制作年不詳	木版単色刷、紙	231×310	個人蔵
32	浅野 武彦	崖と漁船	1979	木版単色刷、紙	335×475	当館蔵
33	浅野 武彦	雲	1983	木版多色刷、紙	246×356	個人蔵
34	浅野 武彦	東尋坊	2005	木版多色刷、紙	255×343	個人蔵
35	浅野 武彦	武彦作品集 第60 豊平峡秋景	1948	木版多色刷、紙	193×155	個人蔵
36	浅野 武彦	武彦作品集 第76 溪谷の秋	1950	木版単色刷、紙	270×189	個人蔵
37	浅野 武彦	武彦作品集 第73 水郷曇日	1950	木版多色刷、紙	222×316	個人蔵
38	浅野 武彦	凍る湖	1978	木版多色刷、紙	300×432	当館蔵
39	浅野 武彦	雪原	1989	木版多色刷、紙	149×210	個人蔵
40	浅野 武彦	雪嶺	1989	木版多色刷、紙	249×467	個人蔵
41	浅野 武彦	演習林にて	1984	木版単色刷、紙	349×272	個人蔵
42	浅野 武彦	樽前雪景	1977	木版多色刷、紙	457×312	当館蔵
43	浅野 武彦	樹林と樽前	2000	木版多色刷、紙	120×171	個人蔵
44	浅野 武彦	雪天	1977	木版多色刷、紙	442×323	個人蔵
45	浅野 武彦	雪旦	1985	木版多色刷、紙	204×305	当館蔵
46	浅野 武彦	雪野	1995	木版多色刷、紙	450×309	個人蔵
47	浅野 武彦	武彦作品集 第71 雪の橋畔	1950	木版多色刷、紙	225×179	個人蔵
48	浅野 武彦	武彦作品集 第84 雪の岳林原	1955	木版多色刷、紙	264×345	個人蔵
49	浅野 武彦	不詳	制作年不詳	木版多色刷、紙	351×433	個人蔵
50	浅野 武彦	雪景(中島公園)	1982	木版多色刷、紙	120×170	個人蔵
51	浅野 武彦	不詳	制作年不詳	木版多色刷、紙	239×325	個人蔵
52	浅野 武彦	雪の白馬	1999	木版多色刷、紙	305×447	個人蔵
53	浅野 武彦	残雪十勝岳	2004	木版多色刷、紙	300×447	個人蔵
54	浅野 武彦	斜塔	2001	木版単色刷、紙	451×310	個人蔵
55	浅野 武彦	ヴェネツィア	2001	木版単色刷、紙	256×348	個人蔵
56	浅野 武彦	不詳	制作年不詳	木版多色刷、紙	440×340	個人蔵
57	浅野 武彦	異国街景	1995	木版多色刷、紙	308×449	個人蔵
58	浅野 武彦	New york	1997	木版多色刷、紙	308×447	個人蔵
59	浅野 武彦	屋上展望	1990	木版多色刷、紙	447×307	当館蔵

第3章 骸骨

番号	作家名	資料名	制作年	材質技法ほか	寸法 (縦×横mm)	所蔵先
60	川上 澄生	封書 (昭和23年2月2日消印)	1948	封筒、便箋二枚		個人蔵
61	浅野 武彦	解剖実習之図	1958年頃	木版単色刷、紙	124×165	個人蔵
62	川上 澄生	はがき (昭和23年5月8日消印)	1948	はがき		個人蔵
63	浅野 武彦	解剖実習之図	1958年頃	木版単色刷、紙	124×160	個人蔵
64	浅野 武彦	解剖実習之図	1958年頃	木版単色刷、紙	123×163	個人蔵
65	浅野 武彦	解剖実習之図	1958年頃	木版単色刷、紙	122×163	個人蔵
66	浅野 武彦	解剖実習之図	1958年頃	木版単色刷、紙	124×165	個人蔵
67	浅野 武彦	解剖実習之図	1958年頃	木版単色刷、紙	123×165	個人蔵
68	浅野 武彦	不詳	制作年不詳	木版単色刷、紙	215×268	個人蔵
69	浅野 武彦	健陀多	1975	木版多色刷、紙	505×372	個人蔵
70	浅野 武彦	不詳	制作年不詳	木版単色刷、紙	436×349	個人蔵
71	浅野 武彦	破船	1978	木版多色刷、紙	437×295	個人蔵
72	浅野 武彦	俊寛	1980	木版多色刷、紙	316×463	個人蔵
73	浅野 武彦	『植山節考』より	制作年不詳	木版多色刷、紙	461×352	当館蔵
74	浅野 武彦	不詳	制作年不詳	木版単色刷、紙	353×465	個人蔵
75	浅野 武彦	不詳	制作年不詳	木版単色刷、紙	358×471	個人蔵

第4章 植物

番号	作家名	資料名	制作年	材質技法ほか	寸法 (縦×横mm)	所蔵先
76	浅野 武彦	花菖蒲	1984	木版多色刷、紙	320×457	個人蔵
77	浅野 武彦	ばたん	1980	木版多色刷、紙	274×208	個人蔵
78	浅野 武彦	ばら	1994	木版多色刷、紙	360×250	当館蔵
79	浅野 武彦	ばら	制作年不詳	木版多色刷、紙	295×234	当館蔵
80	浅野 武彦	水芭蕉	1980	木版多色刷、紙	370×227	個人蔵
81	浅野 武彦	みずばしょう	1981	木版単色刷、紙	118×170	個人蔵
82	浅野 武彦	水芭蕉	2001	木版多色刷、紙	120×170	個人蔵
83	浅野 武彦	不詳	制作年不詳	木版単色刷、紙	340×258	個人蔵
84	浅野 武彦	百合	1984	木版多色刷、紙	204×148	個人蔵
85	浅野 武彦	百合	1994	木版多色刷、紙	199×150	個人蔵
86	浅野 武彦	武彦作品集 第66 辛夷	1949	木版単色刷、紙	182×255	個人蔵
87	浅野 武彦	もくれん	制作年不詳	木版多色刷、紙	238×175	個人蔵
88	浅野 武彦	もくれん	1979	木版単色刷、紙	355×258	個人蔵
89	浅野 武彦	もくれん	1981	木版多色刷、紙	456×315	個人蔵
90	浅野 武彦	志んびじうむ	1987	木版多色刷、紙	450×310	個人蔵
91	浅野 武彦	すいせん	2005	木版多色刷、紙	249×343	個人蔵

第5章 いきもの

番号	作家名	資料名	制作年・発行年	材質技法ほか	寸法 (縦×横mm)	所蔵先
92	浅野 武彦	武彦作品集 第56 剥製 (臍)	1948	木版単色刷、紙	206×146	個人蔵
93	浅野 武彦	ふくろう	2004	木版単色刷、紙	339×252	個人蔵
94	浅野 武彦	白鳥 (1)	1981	木版多色刷、紙	160×110	当館蔵
95	浅野 武彦	群れ	1981	木版多色刷、紙	141×193	個人蔵
96	浅野 武彦	おなが鴨	2006	木版多色刷、紙	269×348	個人蔵
97	浅野 武彦	樹上のなかま	1986	木版多色刷、紙	300×210	個人蔵
98	浅野 武彦	群れる	1988	木版単色刷、紙	360×255	当館蔵
99	浅野 武彦	不詳	制作年不詳	木版多色刷、紙	447×304	個人蔵
100	浅野 武彦	りす	2001	木版多色刷、紙	120×174	個人蔵
101	浅野 武彦	不詳	制作年不詳	木版多色刷、紙	123×172	個人蔵
102	浅野 武彦	牛	1993	木版単色刷、紙	126×176	個人蔵
103	浅野 武彦	百虫譜	1994	木版多色刷、紙	205×152	個人蔵
104	浅野 武彦	不詳	制作年不詳	木版多色刷、紙	238×334	個人蔵
105	浅野 武彦	竜子群泳	1989	木版多色刷、紙	349×252	個人蔵
106	浅野 武彦	いか群泳	制作年不詳	木版多色刷、紙	246×205	個人蔵
107	浅野 武彦	ユートピア	1991	木版多色刷、紙	450×310	個人蔵
108	浅野 武彦	沖縄幻想	1994	木版多色刷、紙	253×350	個人蔵
109	浅野 武彦	鱒	1994	木版多色刷、紙	305×445	個人蔵
110	浅野 武彦	武彦作品集 第77 貝の静物	1951	木版多色刷、紙	244×315	個人蔵
111	浅野 武彦	浜の朝	1993	木版多色刷、紙	307×446	個人蔵

苫小牧市美術博物館 紀要
第6号
(令和2年度)

発行日 令和3年3月
編集・発行 苫小牧市美術博物館
〒053-0011
北海道苫小牧市末広町3丁目9番7号
TEL 0144(35)2550
FAX 0144(34)0408
印刷 (株)とまみん印刷センター